モンガク

余市エコカレッジの
取り組みとヴィジョン

人のつながりを紡ぐ暮らし。

モンガク谷探訪
学び舎で開講した
エコカレッジプログラムから……

田舎で起業講座

トランジションタウンとは

パーマカルチャー概論

**エネルギーを
循環させよう**

多様な学び合い
学び舎とシェアハウス建設で
出会った素敵な話

大企業との研究開発
地方再生を体現
(株)ＬＩＸＩＬ
武部建設(株)

ＮＰＯ法人　北海道エコビレッジ推進プロジェクト

モンガク◎余市エコカレッジの取り組みとヴィジョン　２０１６年 創刊号　発行日２０１６年３月31日
発行　ＮＰＯ法人北海道エコビレッジ推進プロジェクト　デザイン制作　ＣＯＬＯＮＢＳ(北 寛子)　印刷　アイワード

ＮＰＯ法人
北海道エコビレッジ推進プロジェクト

理事長　坂本純科

余市郡余市町登町1863
TEL/FAX：0135-22-6666
MAIL：y.ecocollege@gmail.com
URL：ecovillage.greenwebs.net/

札幌事務所
札幌市中央区宮ケ丘2丁目1-1-303
TEL：011-640-8411
FAX：011-640-8422

晴れた冬の朝、
裏山の中腹から海を眺める。
私たちがモンガク谷と呼ぶ集落の入口に
エコビレッジの拠点がある。
この地を舞台に活動を始めたのが二〇一一年秋。
「北の持続可能なコミュニティモデル」を模索し
そして今、私たちの旅の出発点である
「学び舎」と「シェアハウス」が建つこの地から、
自然に寄り添い、
人のつながりを紡ぐ暮らしを発信させていく。
二〇一二年に描いた
余市エコビレッジ構想では、
地域内外の人々が集い学び合う場を
最初のマイルストーンに定めた。
ビレッジのイメージを
自給自足的な
個人の暮らしの集合体から、
地域で自足しエコアップする
トランジション（持続可能な社会への移行）
に再設定したのだ。
二〇一四年には情報発信基地として
学び舎（研修棟）が、
二〇一五年には
通年の生活と事業の拠点として
シェアハウスが建設された。
ふたつの建物は、
エコロジカルな住まいと
多様なコミュニティの仕掛けを
創造する社会実験であり、
専門家から地域住民まで
さまざまな人たちの
汗と涙の結晶として誕生した。
二〇一六年、地域の生産者と手を携えて、
いよいよ大航海に乗り出す。

人のつながりを紡ぐ暮らし。

ものすごい地吹雪の中、玄関から車までスノーシューで移動。地域の農家仲間が助けに来てくれてほっとした朝。自然が厳しいほど、人の暖かさを感じる。(写真①)

新雪を踏みしめて裏山に登ると遠くの山々や海が見えて晴れ晴れとした気持ちに。家の周りを歩くだけなのに、別世界を味わえる。(写真②)

スペインからやってきたボランティアのポルは、生まれて初めての雪かきに嬉々として勤しむ。(写真③)

薪ストーブはホームセンターの安物だけど、断熱性能のよいエコハウス(学び舎)はいつも暖か。パチパチと薪がはぜる音に癒される。(写真④)

春

畑にまだ実りのないこの時期、食卓は大地の実りでにぎわい、春の味覚を発見する喜びに溢れる。(写真⑤)

地域の持ち寄りパーティーでは山菜をふんだんに使ったご馳走が並ぶ。「ただの雑草だと思っていたけど天ぷらにしたら美味しい」、「こんなものも春先なら味わえるね」(写真⑥)

春の最大課題「薪割り」に挑む大阪のボランティア二人。この時期に割って乾燥させておかないと、次の冬に間に合わない。(写真⑦)

残雪の大黒山を背景に、サクランボが花を咲かせる。白とピンクと緑の三段染めに息を飲む。(写真⑧)

夏

サクランボを好きなだけ食べられるのはこの土地、この季節ならでは。ジャムやスイーツにするのも贅沢な楽しみ。

農作業が追いつかないときは修学旅行生が頼もしい助っ人。諦めていた畑の開墾も高校生らの活躍で叶った。「えこびれファミリー」では外国人や大学生ボランティアとの交流も特徴。（写真⑨）

にぎわう声が絶えない季節。イタドリの茎にパン生地を巻きつけ焚き火で焼く棒パンは、ひと夏中、子どもから大人まで大人気のプログラム。（写真⑩）

⑨

⑩

秋

実りの秋はマルシェやイベントが目白押し。札幌で開かれた「テッラ・マードレ」に余市・仁木の生産者仲間と共に出店。（写真⑪）

母屋の解体に伴い発生した廃材を片付けるワークキャンプ。ボランティアの活躍で山のような廃材がみるみる小さくなった。若者パワーに拍手！（写真⑫）

秋のヴィンヤード。先日の嵐で収穫間近のブドウが落果したそうだ。自然とともに生きることは美しく、かつかくも厳しいことだと思い知らされる。（写真⑬）

雪が降る前に薪小屋の製作を急ぐのはベルギー人のロビン。安心して冬を迎えられるのも若者たちのおかげ。（写真⑭）

⑪

⑬

⑭

⑫

モンガク谷探訪

文・坂本純科

10代の愛読書はハインリヒ・シュリーマンの「夢を掘り当てた人」と本田勝一の「北海道探検記」だった。

大学時代には幕末の探検家・松浦武四郎の「蝦夷日誌」に魅せられ、道内の廃道を辿って歩くという試みにはまった。武四郎はアイヌの集落を訪ねながら北海道中の小さな沢まで細かく踏査しており、そのときの地図や日誌が残されている。

海岸線の主な町村をつなぐ道は今ではほとんどが幹線道路になっているが、中には道路がないところもある。日誌に読み従ってその道筋を辿ると、自分の背丈ほどの薮をこいだり、断崖絶壁で歩けないところを泳いだりしなければならない。クマに遭いそうになりながら道なき道を進むという、後から思えば酔狂にも程がある企画だった。それでも日誌に記された祠(ほこら)や松の大木を発見したり、岬を越えたときにはっとするような絶景を目にしたりする感動がたまらなかった。当時の「武四郎の軌跡を辿る旅」は私の原体験と言えるだろう。

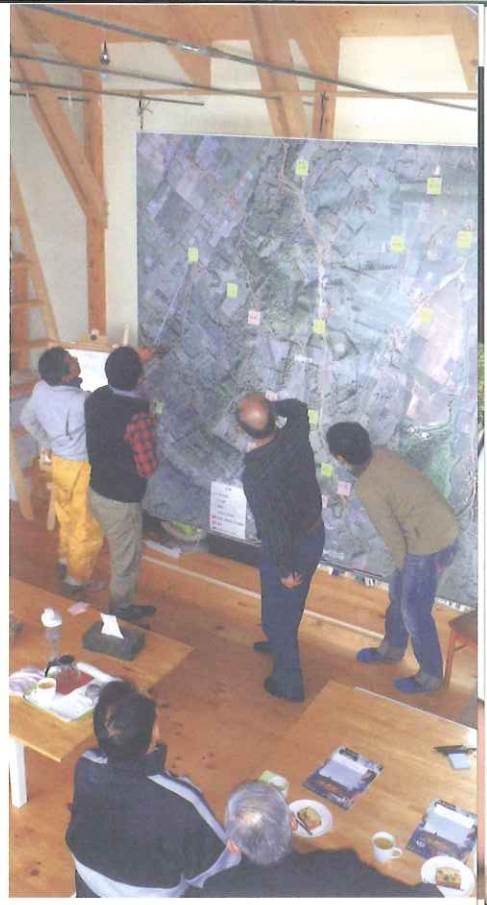
季節ごとに地域の魅力を堪能するフットパスツアー。道端の何気ない草花や普段の農作業もガイドの解説を聞きながらだと意味深いものに。(写真右上)

「モンガク」と呼ばれるこの部落はアイヌ語の地名(アシ、ヨシの多いところ、もしくは蛇の多いところとも言われる)で、道路やバス停の名称として残っている。

隣町の仁木町につながる沢が「モンガク沢」と呼ばれ、かつては人の行き来があったらしい。

歴史に詳しい仲間の一人がそのルートを復活させたいと発案したことから、フットパスの動きが始まった。

フットパス発祥のイギリスでは「誰もが田舎の自然や景色を楽しむ権利」を主張した労働者運動の結果、たとえ私有地でも自由に歩くことができ、またそれを保全することが法律で定められている。雨でも風でもひたすら歩く体育会系のイギリス型フットパスと違って、最近国内で広がっているアジア型は地元の人々と交流したり食文化に親しみながら地域を再発見しようという文化系の取り組みだ。私は移住したばかりのこの土地をよく知りたい、道の再生を通じて地域のいろいろな人に出会いたいと思い、ガイドツアーを提案した。みんなでビューポイントを探しあったり笹刈りをして道を整備したりする中で、自分達の住む地域の良さを再発見する。訪れる都会の人の視点も加わり、ドライブルー



トからは見ることのできない眺めを楽しむツアーがいくつも生まれた。途中で簡単な農作業を手伝ったり、農家の手料理をいただくこともあり、生産者と消費者の直接的な交流も芽生えている。

そんな活動をきっかけにモンガク倶楽部なる集会が開かれるようになった

HEPPが呼びかけ人となり、レギュラーメンバーの地域生産者の他に学生や専門家ゲストが参加することもある。農家持ち寄りの会食は豪華なパーティーに変身することも。雑談の中でよく出る話題が「モンガクのエリアがどこまでか」。

諸説あってなかなか真相はわからない。そこで一度古参の農家に聞いてみようということになり、モンガクの歴史を学ぶ会を開いた。

その日、学び舎に登場したのはエコビレッジを中心に3キロ四方の巨大な航空写真。道路や河川、樹林地、家屋などのデータを落とし込んだもので、これに住民参加で歴史や暮らしのデータを盛り込もうというわけだ。そうしたら出てくる出てくる、かつてあった「峠の茶屋」や「馬の道」、「リゾート計画論」から「弾薬庫」、もちろん「マッサン」の話も。「ストーンサークル」が3つも4つも飛び出すのだからすごい。

そもそも余市は縄文の時代から人が集まる土地だった。人が集うには太陽や水の働きに加えて、人を呼び寄せる力が働いていたに違いない。古老が生き生きとした表情で昔の話を語る様子を見ていると、そんな気がしてならなかった。

そんなボーダーレスな「モンガク」には偶然なのか必然なのか、最近若い新規就農者が集まっており、勢いのないと言われる農村の中で新しいことが始まるワクワク感に溢れている。私たちのエコビレッジ構想もエリアを広げ、時代を超えて広がりそうだ。

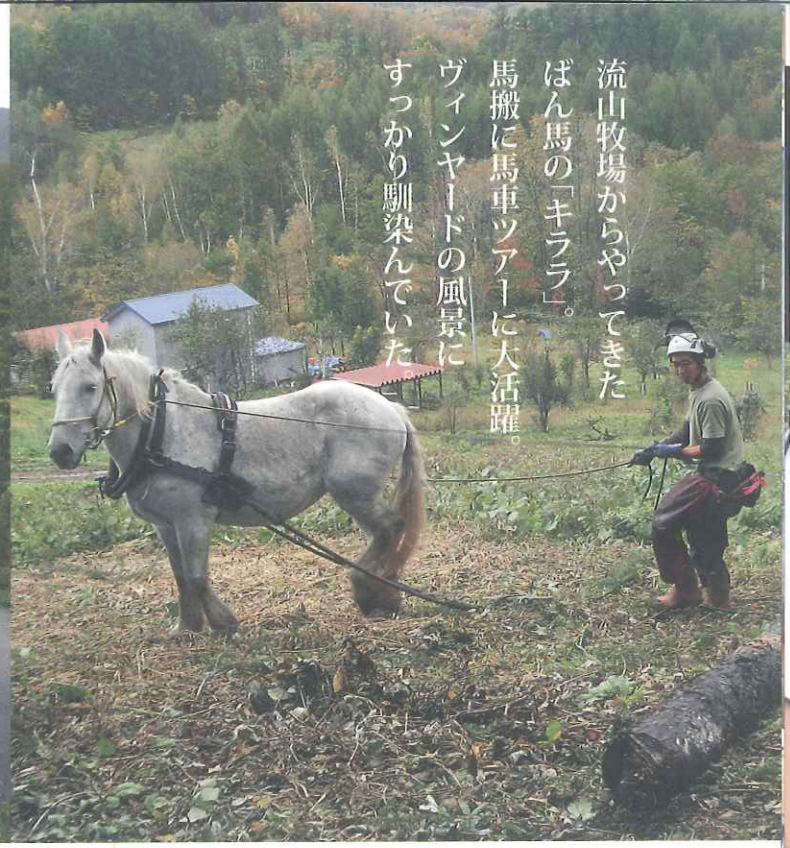
航空写真を見ながら参加者がそれぞれ自然、歴史、生活の情報を出し合い、みんなで共有するワークショップ。過去と現在のデータをもとに、将来のエネルギーや施設計画に応用することを検討中。(写真上2枚とも)
(協力:国立環境研究所、NPO法人デジタル北海道研究会、北海道大学環境科学院)

子どもと過ごした季節

フルーツ王国余市に来たらやっぱり果物狩りでしょう。ブルーベリーやサクランボ、プルーンも「お店に売っているのとは全然違う!」と子どもたち。

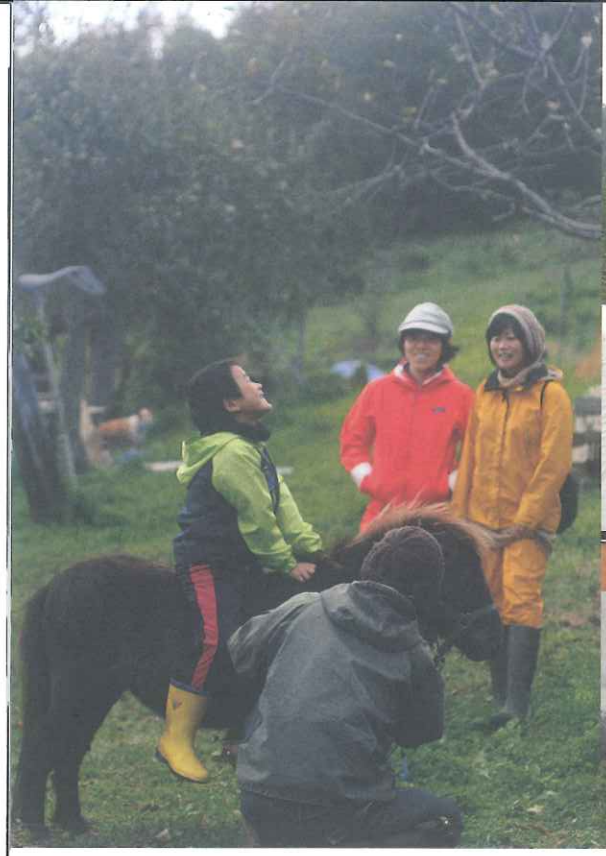
大学生のお姉さんとヨモギの葉を摘む。
「お昼はヨモギのパンケーキ作ろうか」
「わ〜い」

北海道とは思えないような暑さの8月に福島からやってきた31人の子どもたち。地元の小学生やボランティアの大学生らと真っ黒になって遊んだっけ。



流山牧場からやってきた
ばん馬の「キララ」。
馬搬に馬車ツアーに大活躍。
ヴィンヤードの風景に
すっかり馴染んでいた。

「お嫁に来た頃は
馬で畑を耕したよ」と
近所のお母さん。
エコロジカルな
農業を支え、
地域の人々をつなぐ
役割を果たして
くれそう。



田舎で起業講座

講師 宮本英樹（合同会社北海道観光まちづくりセンター代表）

北海道を代表する社会起業家の宮本英樹さん。田舎暮らしをしたい人、都会とは違った働き方を求めている人は増えているものの、やっぱりネックはお金と仕事。雇用の枠は限られているし、自分で何かやりたいと思いつつもどこから始めたらいいのか…、そんな悩める人たちの目からウロコが落ちるような宮本節を聞くことができました。

田舎と都会を繋げる

ソーシャルビジネス、コミュニティビジネスのチャンスこそ田舎の優位性。舞台を田舎にフォーカスすると、田舎で起業するためには、田舎だけでビジネスを考えるのではなく、田舎を都市とつなげるパイプと工夫が必要で、マーケットの創造なしに起業はありません。

現代社会における経済成長の条件とは「自分が望む人生を送るためになりたい自分になる権利」を保証することだとノーベル賞経済学者アマルティア・センは言っています。現代はその理想と現実に差が生じていて、それが成長の枷になっている。その原因の一つが労働者それぞれの社会関係が上手くいっていないことです。

ソーシャルビジネスはそこを解決する仕組みを創造することで社会性、事業性、革新性が重要な要素です。

複数＋複数×異分野

大沼で現在進行中の「どさんこを活用した体験観光事業」では、在来和種馬の保存と活用（ホースロギングやホースセラピー等）そして、若者の働く場の創出、敷地内のファームレストランや簡易宿泊施設の整備など、「農畜産業・観光・健康・生物資源・食」といったさまざまな領域を組み合わせたことによる新たな価値を生んでいます。

ビジネスのポイントは、小さくシンプルに始める、幸せのおすそわけ、小さなビジネス（サブシステム）を複数持って複製する、異分野をクロスさせる（たとえば自然と健康、自然と観光、自然と文化など）ことでしょう。北海道の価値は、ずばり一次産業と自然。そして社会的起業で求められる分野はヒューマンサービス（医療、介護、教育、子育て、文化など）、コミュニティ活動（環境、まちづくり）、特に日本なら健康ですね。

メインビジネスで儲けられないなら（たとえばフットパスの参加料では収益にならない）サブシステムで儲ける。（たとえばカフェ）いろいろな人が関われるシステムを作ることが大切です。

参加者の声

・現場の泥臭い話が面白く、納得できる部分が多かった。余市でも移住したい人、農業を始めたい人もいるが、なかなか新規就農して定住するところまでいかない。いろいろな関わり方、サポートが必要だろう。ここで、活動を担う人と訪れる人、地域の人がどんなネットワークを作っていけばいいだろうか。（40代男性）

・大沼の事業では、原点に「人の幸福」を置いていて、多様な形で関わっている若者たちの個性や自主性、自己実現を尊重していることが伝わりました。「人に助けてもらう力」を養うことの意義、「自分のことは自分で」という価値観だけでは、人とは本当の意味で繋がれないことを改めて考えさせられました。

・「学習の窓」を閉ざさず、「本物を追求していく」姿勢の重要性が語られ、自己変容を生み出すには「交流」が必要との指摘がありました。大沼はじめ道内各地の事業を通じて、たくさんの人々が交流し、その意識を変えていっている、北海道らしい夢とやりがいのある社会事業のお話に大きな希望をもらいました。（40代男性）

トランジション・スピリットは、手を動かす、見ず知らずの誰かに任せていたものを自分でやってみる。

トランジションタウンとは

講師 小山美佳江（NPO法人トランジション・ジャパン共同代表）

移行・変遷を意味するトランジション。トランジション・タウン（以下TT）とは消費主義・経済成長優先・大資本依存の社会から地域資源を大切にする社会への移行を目指すものです。世界43か国で非公式のものも含めれば一万カ所以上に上る活動に広がっているとか。日本で最初にこの活動を紹介し、普及活動に取り組んでいるトランジション・ジャパンから小山さんをお招きし、活動の意義と最近の状況を語っていただきました。

TTの3H

TT活動のキーワードは、①脱依存、②レジリエンス（再生する力、復元する力、しなやかさ）、③そうぞう力（イメージする想像力、クリエイトする創造力）。一市民が自らのそうぞう力を駆使しながら地域の復元する力を高めていく実践的な提案活動を目指しています。

TT活動は「やりたい人がやりたいときにやりたいことをやりたいだけやること」を大切にしています。持続的に活動するために重要なのは3H（Head考えること、Heart情熱を持つ・楽しんでやる、Hand頭でっかちじゃなく手を動かす）のバランスを意識すること。メンバーがTT説明会に参加していること、三人以上のメンバーがいること、月一回以上の集まりをすること以外にルールらしいルールはなく、自分たちのやり方、ペースを重んじているのが特徴です。

TT藤野の場合

日本のトランジション活動の先駆けとなったTT藤野は神奈川県の北部、芸術の街として知られており、パーマカルチャー・ジャパンの事務局やシュタイナー学校の活動など新しい活動を受け入れやすい風土があります。二〇〇九年にTT活動がスタートして以来、今ではワーキンググループ（クラブ活動みたいなもの）がいくつもあります。

・地域通貨よろず…メーリングリストに何をしてほしい（ぎぶみー）・何ができる（ぎぶゆー）を書いて登録し、成立したらメーリスで流します。小さな地域資源を可視化できる。地域経済を活性化する目的というよりは、地域のコミュニティツールとしての目的が強いです。

・森部…森が多いので森の再生について考える。間伐や水脈の整備をしたり、間伐材の利用を進める中で製材所を買い取って活動したりしています。

・藤野電力…震災をきっかけに電力の事を考え、地域に電力を自給している人がいて教えてもらうところから活動を開始。太陽光パネルのつなぎ方もわからないので、それを教えるワークショップを始めたところ事業化されました。現在は無料で電気を使える充電ステーションを地域に作ろうとしています。

・お百姓クラブ…当初畑を作るものだったが失敗してシードバンクを始めたり地域内5か所で共同養鶏を始めたり、活動は常に変化しています。

参加者の声

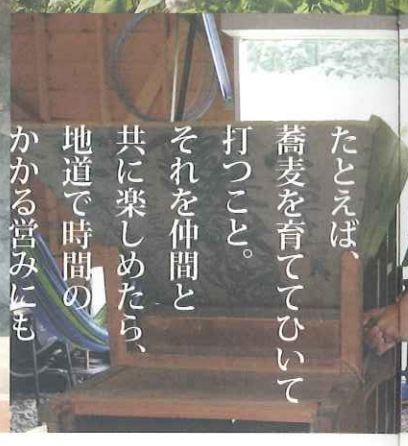
・閉じたイメージを持たれがちなエコビレッジもトランジションと連携することで多くの人がアクションから気軽に参加でき、開けるイメージになると思いました。一方、環境問題を伝える難しさや誰でもTTと名乗れるという求心力の無さが課題かもしれません。（30代女性）

・ホームページを見てもあいまいにしかとらえられないけれども、話を聞いて具体的にイメージできました。（20代男性）

・TTは魅力的だと感じましたが、地元の人、高齢な人にどう伝えるか、工夫が必要だと思いました。（30代男性）

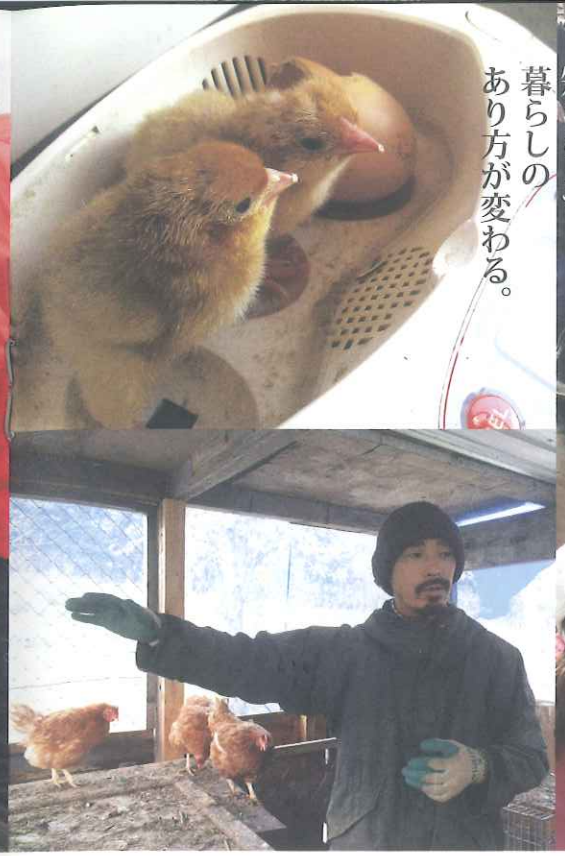
・TTの脱依存というキーワードが響きました。都会でやることのハードルはあると思いますが、小さく始めるアプローチはいろいろある事を実感しました。（20代男性）

たくさんの喜びと発見がある。



たとえば、蕎麦を育ててひいて打つこと。それを仲間と共に楽しめたら、地道で時間のかかる営みにも

消費者の目線では
肉であり
卵である鶏も
自然界では
いろいろな
役割を持っている



普段、口にしているものを深く知ることで暮らしのあり方が変わる。

エコカレッジ通年プログラム2015から

パーマカルチャー概論

講師　山田貴宏（ビオフォルム環境デザイン室代表 NPO法人パーマカルチャーセンター・ジャパン理事）

建築家であり、パーマカルチャリストでもある山田貴宏さん。山田さんのファシリテーションでパーマカルチャーの基礎知識を学び、そのデザイン論をフィールドで応用して理解を深めました。

社会的不正義や紛争、産業型社会の疲弊等により、世界は大きな転換期を迎えています。それは日本にも訪れており、経済は縮小、過疎化や少子化、超高齢化というさまざまな問題を抱えています。さらにピークオイルという人類最大の課題に直面した私たちは「どのような未来を描くのか」を問われてます。このまま急激に下降してゆくのか（マッドマックス）、それとも画期的な解決策が見つかりこれからも成長の一途を辿るのか、あるいは、これら負の現象に上手に適応し、持続可能な社会作りを行うことで、ピークを維持したり、または滑らかな下降（創造的な下降）を描くことができるのか、それらはすべて私たちの取り組みに掛かっているのです。

パーマカルチャーによる場と価値

パーマカルチャーとは「パーマネント」＋「アグリカルチャー」の造語で、環境や人相互の交流、そして経済的に持続可能である農業や文化を支えるデザインツールのひとつです。社会や住まい、環境、仕組みなどをリデザインし、「循環」と「関係性」を構築することで『場』と『価値』を創り出すのが目的です。

使いやすさから環境インパクトまで、多視点でデザインすることがパーマカルチャーの概念の基礎と言えるでしょう。デザインしたものに周りのものとの関係性を持たせる点も必要となっていて、インプットとアウトプットがつながっている事が重要なのです（たとえば森に入射する太陽光と存在する植物や生物は関係性を持っている）。これは現代の家やマンションなどの建築物には失われている要素であり、それこそが持続性のない生活を生んでいるのです。

リデザインの着眼点と手順

リデザインとは、①正しい位置に戻すデザイン、②他との関係性を作るデザイン、③人に伝えられるデザイン。リデザインするには対象とするものをリデザインする理由と評価基準の設定が必要です（たとえば、ペンが持ち運びにくいからリデザインする場合、今の利点をなくさず持ち運びが便利になっていれば高評価である、というように先に設定しておく）。また、地域のリデザインを行う時には、①土地の観察を行い、②マッピングやレイヤリングで整理をした上で、③ゾーニングを行うべきです。その際に、雨量などデザインする地域の環境値などをチェックしておくことも大事です（定量性チェック）。

参加者の声から

・レクチャーを実践的に理解するために、周辺を散策しながら資源の発見と「リデザイン」のエクササイズをしました。グループAでは「谷間の一本道が良い風景」、「山、木、海、鳥、野草など自然が資源」、「地域の人がそれぞれ知識を持っていて友好的だが、地図、看板等のガイドとなるものがないと気づかないものばかり」などの特徴がシェアされ、そこから「移動式休憩所」という屋台の様な移動式の小屋にガイドを専属させるというアイデアが生まれました。

・グループBの案は余市エコカレッジ内の水源利用について。多雪地域で傾斜地が多い地域であることから、水車を造って多量の水力エネルギーが利用できるのではないかという提案が出ました。

・山田さんからは「屋台を移動させる際に、地域内の物質の運搬を同時に行うことで多機能なデザインになるであろう」「雨量などのチェックを怠ってはいけない」などアドバイスがありました。

エネルギーを循環させよう

講師 岩井尚人（株式会社ｉｅｐｏ）

大学卒業後二十年間電力会社に勤務していたという岩井さん。「地球温暖化が電力会社に与える影響調査」を担当し、課題にぶつかって社長に相談したところ「その研究実践をお前のライフワークにしろ」と言われたことから市民活動として環境活動を始めたそうです。

退社後起業され、電力消費をなるべく少なくし、かつ生活の快適性を維持向上させる全道各地のプロジェクトをリードしている岩井さんの取り組みについて伺いました。

省エネの考え方

省エネ・節電のポイントとして、①体感温度をコントロールする、②エネルギーロスを防ぐ、③エネルギー全体を考える、の三つが挙げられます。

実際の温度と体感温度にはかなり大きな違いがあり、体感温度は①室温、②周囲の表面温度、③湿度、④気流の４つのファクターから決定されます。これらのうち、どこに手を加えればエネルギー消費少なく体感温度を上げることができるかを考えると、単純に室温を上げるのは一番消費が大きいわけです。

エネルギーがうまく循環するということは、すなわち建物内のエネルギーの流れの詰まりや汚れをとってエネルギーの消費やロスを減らすことです。さらに言うと、電気の消費量が減ったとしても石油の消費が増えればそれは節電ではあったとしても省エネではありません。だからエネルギー全体を考えなければならないのです。

省エネと快適性

「省エネには我慢が必要というのは思い込み。省エネと快適性はトレードオフでなく両立します」

現状では、ほとんどのエネルギーロスは業務系の建物で起きており、これを真剣に対策すれば全体で平均三割、最大で六割程度消費エネルギーを削減できます。重要なことは再生可能エネルギーをガンガン増やす前に、まず消費レベルを適正レベルに抑えること。そうでないと再生可能エネルギーによるメガソーラーとかウィンドファームによる乱開発が起こりかねません。平均で三割削減できれば極端な話、原発はいらなくなるでしょう。

省エネと経済

それともうひとつ重要な点は、こういった省エネは、大企業でなく地域の中小メンテナンス事業者の仕事になるということです。省エネというと経済としては後ろ向きに響くけれど、新しい地域の経済政策として取り上げてほしいですね。そうすれば省エネで浮いたお金を民間の省エネ事業者に融資するようなさらなる発展も考えられます。

参加者の声

・意外に基本的なところから節電できると知りました。（30代女性）

・再生エネルギーの重要性はよく言われますが、省エネも大きな可能性も持っていることに感心しました。（20代男性）

・実際に削減できるなら得だと思いました。家庭でやるレベル、地域でやるレベル、街でやるレベル、さらにその中でもどういうレベルでエネルギーロスをなくしていくかを考え模索していくのが大切なのだろう。（20代男性）

・ハーブを植えるなどの実践を通じて自己流でやってきたことに気付いた。専門家の意見を聞くことが大事だと分かりました。エネルギーに関しては暮らし方の五感が鈍っているというか、考えなくなっていることを感じ、考え方を取り込んでいきたいと思いました。（30代女性）

・総合的に考えるエネルギーカットの視点にはとても驚きました。また、新たな産業の構築にもつながる可能性がある点はすごく興味がでました。（40代男性）

多様な学び合い

余市エコカレッジの大きな特徴は多様な人材だ。食や農、建築、エネルギーと多岐に渡るテーマの専門家、地域住民や市民活動団体をはじめ大小企業、行政、研究機関など、その幅の広さがずばりこの場の魅力だろう。そんな多様な人びとが関わって建設された学び舎とシェアハウスは、その魅力を体現している。

学び舎
エコロジカルな住まいのデモンストレーション

余市エコカレッジは、幅広い人を巻き込んだ、地域トランジションを目指している。その意志表示が集いの場である学び舎だ。会議や研修を中心に、地域イベントなど開かれたコミュニティスペースとして計画された。

また、エコハウスの技術をデモンストレーションするべく、いろいろな趣向を凝らし、評価を得ている。資金調達においても、出資や寄付、クラウドファンディングなどを通じて多くの個人に協力をいただいたことも特筆に値するだろう。

マスターアーキテクトの山田貴宏さん(ビオフォルム環境デザイン室)には、何を作るのか誰が住んで誰がお金を出すのか、まるで白紙の状態から関わっていただいた。様々なステークホルダーの立場や意見のぶつかり合いを調整しながらプロジェクトを前進させ、最終的なものづくりに結びつけた山田さんのファシリテーションは、まさに新しい価値を創造する技だ。

■建設概要
建築面積　59.5㎡、延床面積89.4㎡、木造平屋
工事期間　2014年5～10月
総工費　2000万円
募金　350万円
(NPO法人北海道エコビレッジ推進プロジェクト)
設計:ビオフォルム環境デザイン室/アトリエmomo/風のふ設計室
施工:武部建設株式会社
事業主体:株式会社HALKUL

■道内産木材を使用
棟木ーアカエゾマツ(野幌産)、登り梁ースギ(厚沢部町)、柱(見栄掛かり)ーカラマツ(下川産)
柱(隠ぺい部)ーカラマツ(十勝産)、床材ーストローブ松(日高産)、外壁材ーカラマツ(空知産)
二階床梁ー古材(タモ・エンジュー箇所)
・太陽光や風の流れを利用したパッシブデザイン
・個体と液体を分離し、水も電気も使わないバイオトイレ(LIXIL提供)
・間伐材を利用した断熱材(ウッドファイバー)、薪ストーブ等環境負荷の少ない資材やエネルギー利用
・土に触れる農的暮らしに便利な土足で入れる台所と通り土間
・高い断熱気密の効果で外気が氷点下10℃になっても室温は7℃以下にならない。

シェアハウス
農村型集住の提案

いつでも自分だけの自由になる時間と空間を求め、人のつながりを分断し、膨大な無理や無駄を背負うことになった現代社会。その社会の根幹を揺るがす環境問題、社会問題を解決するキーは分断に逆行すること、つまり分かち合う暮らしに他ならない。

共同生活は昔に戻るというイメージが持つ人間関係の煩わしさから嫌われるが、地縁血縁ではない多様な人との暮らしにはポジティブな要素もたくさんある。土地のあり余る北海道の田舎で共同生活なんて、と笑われるかもしれないが、実は北国ほどシェアの意義は高い。施設面での工夫や住民間のコミュニケーションをサポートする仕掛けがあれば、経済的社会的に豊かでかつエコロジカルなシェア生活が実現するだろう。

暖房にかかるエネルギーを共有し、農作業や除雪などの労働を分かち合うことができたら、北国のハンデイをカバーしつつ、田舎暮らしを充実して過ごすことができるに違いない。

■建設概要
建築面積　116.76㎡、木造平屋
工事期間　2015年10月～2016年3月
総工費　2100万円(農水省都市農村共生交流交付金事業)
設計:アトリエmomo／風のふ設計室
施工:武部建設株式会社　事業主体:株式会社HALKUL

プロとアマのコラボレーション

プロの領域にアマチュアが入り込むことは、お互いに大変な苦労を伴う。

ふたつの建設では設計事務所や施工会社、メーカーのプロフェッショナルをはじめ、地域住民や学生ボランティアが作業に参加し、現場の緊張や感動を共有した。その経験は、出来上がったもの以上に貴重でありがたいことだったと思う。

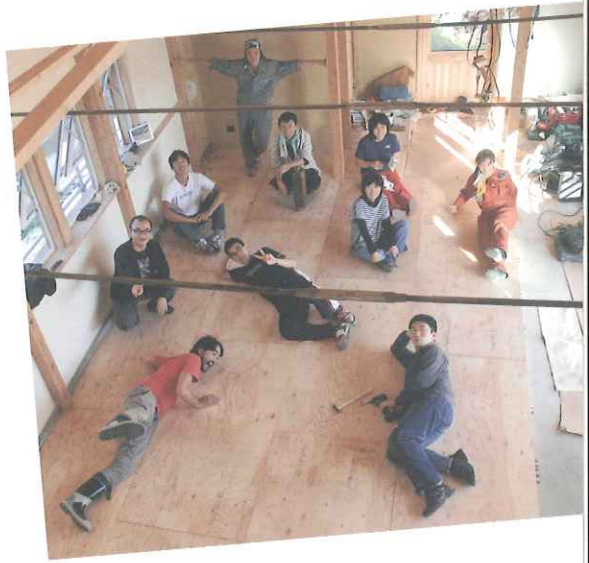
高度に分業が進んだ結果、トータルな情報共有ができなくなったり、受動的な大量の消費者を生みだした。

使い手と作り手が尊重し合い、学び合うものづくりは、よいものを大切に使う社会、ひいては持続可能な社会への一歩だと言えないだろうか。

学び舎とシェアハウス建設で出会ったステキな話

全国床張り協会

思わずくすりと笑ってしまうネーミングの団体。床張りを通じて自らの手で住処をつくる力を養うとともに、朽ちかけた空家を再生しながら仲間をつくり地域を元気にするというコンセプトは余市エコカレッジの考えに共通するものがある。関東や関西からわざわざ床を張りに来ると聞いて「意味わかりません」というプロたち。床張りはそれだけ楽しくて貴重なのだ。



全国床張り協会では、日本各地で床張特訓と称した床張りや塗装のワークショップを企画実施している。農村の空き家、都会のマンション、一年かけて家の建て方を習うプログラムも。http://yukahatter.jp/

大企業との研究開発

たかがトイレ、されどトイレ

(株)ＬＩＸＩＬ

オーガニックだ、無添加だと食べることには結構うるさくなってきた日本人も、出す方にはまだまだ無頓着。出した先のことは誰も知らないし、知りたくもないのが現実だ。

でも排泄は食べることと同じくらい重要な人間の行為であり、自然界の循環の一部だ。個体と液体を分離するバイオトイレはエコカレッジの学習プログラムのひとつになっており、これまで研究と実践を重ねてきた。

日本ではあまり例がないが、最小限のエネルギーで衛生的に排泄物を処理するだけでなく、それを資源として活用することで循環の仕組みを学び、人間も自然の一部であるという当たり前の事実に感動できる施設だと考えている。

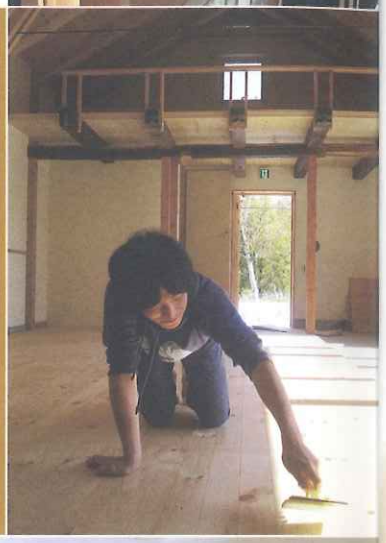
江戸時代に東アジアを訪れたアメリカ人研究者が人間のし尿を農業に利用するその究極なリサイクルに舌をまいたという記録もある。先人の智恵を次世代の先進技術として活かしたい、しかしながら、気密の高い近代住宅で快適に取り入れるには、プロの技が必要だということで、大手メーカーのＬＩＸＩＬとの共同事業が実現した。

日本の大企業は、きっと、こんな素人の取り組みには耳を貸してくれないだろうと思っていたが、ダメ元でメールを送って提案したところ、意外なことにすぐさま北海道まで来てくれた。地球上にある有限の資源をいかに大切に使い共有していくかという問題は、国境も派閥も関係ないし、企業も行政も草の根団体も一緒に取り組まねばならない。大手メーカーの研究者の方々とトイレ談義だけでなく、そんな話でも盛り上がった。

LIXIL開発担当の中宮さんとトイレの設計について協議する。建築士も設備会社も、もちろん初めての試みで、最初はみな半信半疑だった。

ボランティア

ボランティアはエコビレッジに欠かせない強力な仲間たち。敷地の測量やグランドデザインから関わってくれた学生もいる。設計には彼らの若い視点、将来のユーザーとしての意見も取り入れた。女性建築家アトリエｍｏｍｏの櫻井百子さん、風のふ設計室の今井歩さんのお二人が大胆なセルフビルドワークショップをリードし、プロとアマチュアの架け橋となってくれた。



開発中のバイオトイレはアジア・アフリカ向けに試行しているそう。第三世界ではトイレの文化や適切な施設がないために、不衛生な環境が原因で生命を落とす人も少なくない。ＬＩＸＩＬ社はそのような国々の衛生状況を改善し、かつ生成物を堆肥として農業に利用できるよう研究と普及を進めている。

日本だって、ひとたび電気や水が使えなくなれば、トイレが最大課題のひとつになること、そして既設のインフラに頼った暮らしがどれほど脆弱であるか先の震災でよくわかったはずだ。

残念ながら、国内では、東北の震災支援で試作品を提供して喜ばれたものの、その後の展開には至らなかったようだが、下水施設のない地域、あるいは災害時の一時利用など、その技術は将来応用される機会があると思う。

何度も打ち合わせを重ね、いよいよ完成した日本で初めての個液分離型の無水無電バイオトイレ。まだ一シーズンしか使用していないが、オガクズなどの誰でも手に入れることのできる天然資材を少々用いるだけで、暑い夏でも臭気や虫の問題はほとんどない。

生成物を外部に搬出する作業はまぬがれないが、以前に比べて不快さは格段に減少している。今後は、この作業をより学びとして深められるような教材やプログラムの開発を進めたい。

水も電気も使わないバイオトイレ。設置後も臭気のチェックなどモニタリングを行っており、共同研究が継続している。海外では肥料としての効果拡大に注力しているとか。(写真左)

地方再生を体現

職人を育て地域再生に取り組む

武部建設(株)

武部建設は、北海道の歴史風土や地球環境保全を意識した住宅づくりで名高い。

エコロジカルな北方建築のトップランナーであるばかりでなく、伝統大工技術の継承や古民家再生など古いものをこよなく愛し、北海道の地方再生に取り組む企業としても尊敬を集めている。

「学び舎」と「エコハウス」の建設では、職人さんたちと生活を共にし、さらに床張りや断熱充填などの作業に参加しながらプロの世界を間近に見、その精神に触れることができた。

そこでわかったことは、彼らが造る住宅が人の心を打つのは、優れた断熱気密ではないということだった。C値やQ値で人は説得できても感動はさせられない。人が感動するのは心地好さを感じたときであり、造った人びとの「まごころ」に触れたときだ。私のような素人でも、空間の気持ちよさは感じられるし、職人さんの「まごころ」は間違いなく伝わるのだ。

武部社長に宛てた手紙から

五月末に着工した学び舎建設工事がいよいよ完了します。

昨日、散らかった現場を見て焦った私は、せめて大工さんが手塩にかけた柱や梁くらいはきれいにしようと思って掃除を始めました。改めてその柱や梁を間近に見ると、「この鉛筆跡は山谷さんのものだ」とか「この美しい継ぎ目は山本さんが刻んでくれたのかしら」と一つひとつの材料がとても愛おしく感じられました。

遠目にはわからない細かな作業を確かめながら、「こんなに丁寧に作ってくれたんだなあ」と思うと涙が出て止まりませんでした。幸いその日は私一人だったので誰にも不審がられることはありませんでしたが、しばらく泣きながら柱を磨いていました。

今回、学び舎を造るのに関わったおよそ30人の人たちは、多かれ少なかれ私と同じ感謝や尊敬の気持ちを抱いたに違いありません。それは作り手の様子を直に見、少しでも自分で手を動かしたからこそ味わえる感動です。そんな体験をさせてもらったのは、立派なものを造っていただいたことと同じくらい、あるいはそれ以上に価値あることだったと思います。

「棟梁の働き方、人への接し方から自分の仕事への姿勢を見直した」と話してくれた京都の造園家。「大工さんって格好いい！」と目を輝かせていたのは長野から来たボランティアの女の子。学び舎は建設過程で多くの人たちの心に大切なものを残しました。

余計なお世話かもしれませんが、私はものづくりや職人さんの素晴らしさを広く社会に伝えたいと考えています。それは必ずしも技術の継承という意味ではありません。その人たちの姿こそがよい社会を創

武部建設の棟梁が、農家や学生、中には生まれて初めて工具を持つような人まで懇切丁寧に指導してくれた。参加した人たちはプロの仕事の奥深さに尊敬と感動を覚えずにはいられなかった。このような機会を与えてくれたプロに心から感謝。

るための精神性であり、希望だからです。

武部建設の誇る敏腕大工の中でも、山谷さんはこの試みに最も適した棟梁だったのではないかと思います。彼の優れた技術に加えて、思いやりに溢れた仕事ぶりや人との接し方は尊敬に値するものでした。

最後に、この度の私の提案に対する武部社長の寛容なお計らいには、言葉では現せないくらい感謝しています。本当にありがとうございました。このご恩は学び舎を通じて必ず社会に還元するとお約束します。

これからも素晴らしい職人さんを輩出され、後世に残るよいお仕事を続けてください。またご一緒させていただく機会があることを祈っています。

（二〇一四年十月三日　坂本純科）

武部さま

いつもお世話になっています。

今週、渡部さん達が工事を完了して引き上げられました。お二人が去った日は私と鵜飼さんの二人、涙とともにお見送りしました。20日には足場が外れて美しい建物が姿を見せています。

約一ヶ月あまり、例によって我が家はスタッフやボランティアが毎日にぎやか、大工さん達が「ただいま」とお帰りになると、みんなで「お帰りなさ〜い」とお迎えして、わいわいと食卓を囲んだことが早くも懐かしくてたまりません。最後の方は、毎晩遅くまでお酒を飲んだり、写真を見せあったりして楽しい時間を過ごしました。今週はたまたま私一人、本当はたまった書類を片付けなくてはいけないにもかかわらず、寂しさのあまり仕事も手につかない有様でした。

ボランティアや農家仲間が「とても勉強になった。素晴らしい経験だった」と言うように、私たちにとって大きな学びであり素敵な出会いだったのは間違いありません。

短い間でしたが、家族のようなお付き合いをしていただき、素人の農家ビルダーを熱心に指導してくださったお二人には本当に感謝しています。そして、武部社長のご理解とご協力に心からお礼申し上げます。

完成の日に胸を張ってみなさんをお迎えできるよう、今後も精進しますので、見守っていてください。

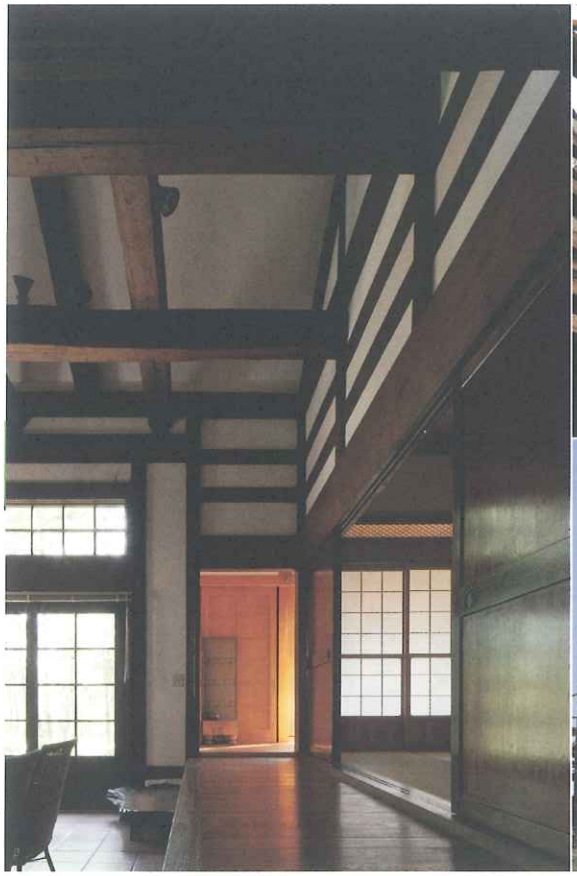
どうぞ、引き続き、よろしくお願いいたします。

（二〇一六年一月二日 坂本純科）

UK工務店
（地元農家ビルダー）

地元余市・仁木で農業に携わる鵜飼さんと木原さんの頭文字をとった名前。にわかに結成されたアマチュア工務店だが、見事なチームワークでシェアハウスの内装を仕上げてくれた。骨組みを施工した武部建設の大工さんとはおよそ一ヶ月半、現場を共にし、まるで長年の師弟のようなコラボレーションを見せてくれた。

天井や壁のボード、床張り、建具製作一切をUK工務店が行った。二人ともセミプロの腕前だが本格的な家づくりをプロと一緒にやるのは初めて。苦労しながらも「とても勉強になった」



大工さんたちと交わした会話の中で「古民家解体」の話が最も強く心に残っている。

その写真が語るストーリーは、自分の知らない新しい世界だった。

一枚一枚ヴェールをはがされるように建物が形を変え、最後は大地と空が残される。それを一連の写真で見たとき、まるで宗教画を鑑賞するような感覚を覚えた。「古民家再生」の話はもちろん素敵だが、「解体」がこんなに感動的だなんて思いもよらかなった。誰にも見られない、お金にもならないかもしれない、それでも材料の一本一本を丁寧に手作業ではずす人たちがいるなんて奇跡に近い話に聞こえた。

以前、あるセミナーの席で武部社長に「古材収集にどんな価値を見出しているのですか」と伺ったことがある。社長は若い棟梁を指して「うちの大工です」と短く答えられた。大工の技術を向上させ、ものづくりの精神を育てることがその成果だと。

そのときの対話がずっと記憶に残っているが、解体の写真にその証拠を見た気がした。

武部建設では、古民家再生に取り組んでおり、北海道の気候風土や現代の生活様式に合わせてアレンジする「モダンクラッシック」という独自のデザインを提唱している。三笠の会社には、手解体した材料を保管する古材ギャラリーとモデル住宅がある。エコカレッジの学び舎では、梁の一部に古材を利用した。
（写真右の2枚は、解体風景。写真左は、モデル住宅）

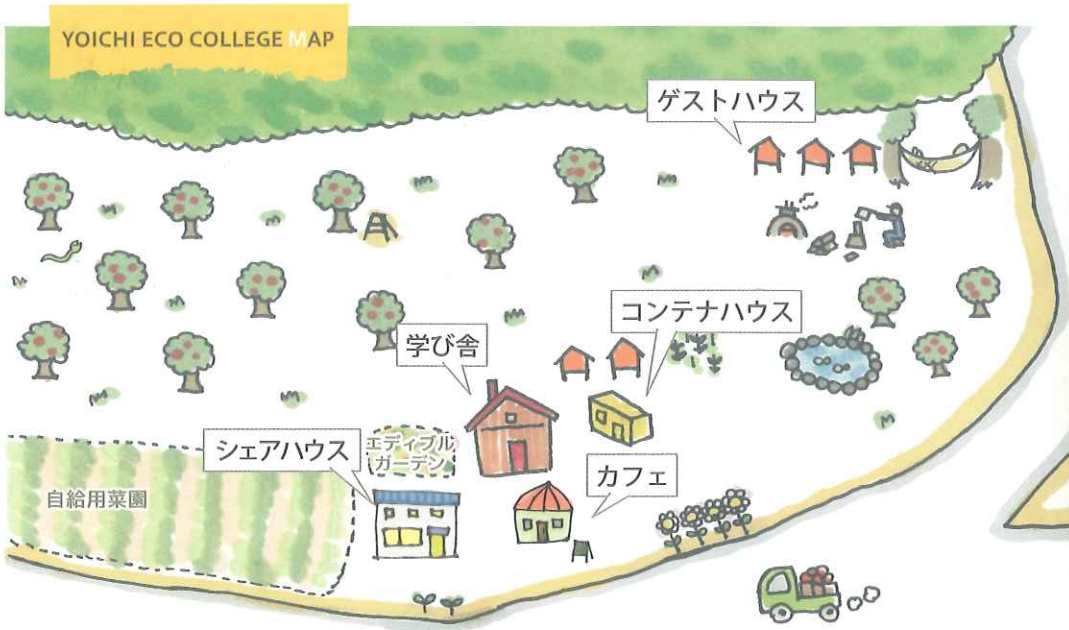
余市エコカレッジは、「持続可能な暮らしと地域」を実現するための学び合いと、それを仕事や仕組みとして試行実践する場です。

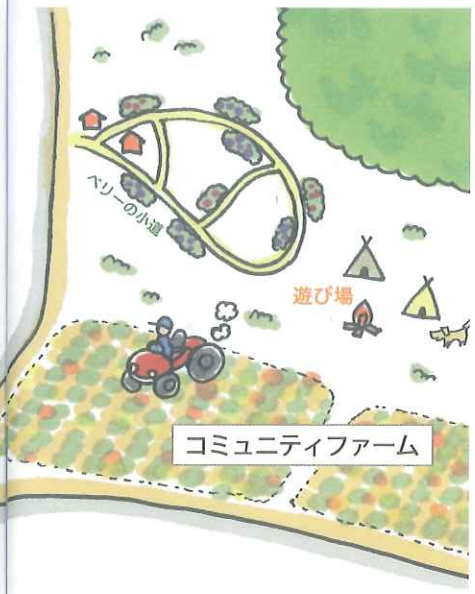
現場の素材から資源を見つけたり、地域課題を解決しながら主体的に「気づく力」「考える力」「協働する力」を身につけます。

1 環境負荷の少ない食料生産や住まいに必要な適正技術を学び、地域における実践者を育てます。
2 ひとりひとりの個性が発揮されるとともに、組織やコミュニティの中で互いの多様性を尊重しながら協調するためのコミュニケーションやグループワークを学びます。
3 貧困や環境破壊を産むグローバル経済に対して、地域で分かち合うための「しごと」や「仕組み」を提案し、実践の基盤を創ります。

こんなテーマで学べます

・環境保全型農業
・エコロジカル建築
・環境共生型汚水システム
・再生エネルギー
・コミュニティビジネス
・ソーシャルビジネス
・森林環境保全と利活用
・持続可能な地域経済
・エコ・コミュニケーション
・ファシリテーション





施設の利用案内

・学び舎……
研修、会議、イベントなどの目的で貸し切り利用できます。
（最大30人、宿泊定員10人、調理施設、薪ストーブ、バイオトイレ、シャワー洗面室、プロジェクター等装備）
12時間利用：12000円
24時間利用：18000円
宿泊：1人1500円（4～10月）
2000円（11～3月）

・シェアハウス（定員：14名）……
素泊まり：5000円
朝食つき：6000円
2食つき：7000円
体験プログラムつき：10000～15000円（近隣の農園や施設のツアーや食事の内容などご要望に応じて）

・コミュニティファーム……
区画貸しします（100㎡単位）、休憩小屋、トイレ、農具等の利用ができます。

参加方法

一般向け……
各種講座や体験プログラムを不定期に開催しています。
エコカレッジの視察や見学は事前にお申し込みください。
（内容はHPでご覧ください）

グループ向け……
学校や企業、自治体、市民団体など、それぞれの関心テーマや条件に応じてツアーや研修をご提案いたします。

これまでの活動例……

・農園スタディツアー（2013年～）
・フットパスツアー
（2013年～協力／エコネットワーク）
・スイーツコンテスト開催（2013年、2014年協力／北海道大学農学部）
・無水バイオトイレ研究
（2014年～協力／㈱LIXIL）
・子ども農山漁村交流事業
（2015年～農水省交付金事業）
・住民参加型GIS
（2015年～協力／北海道大学環境科学院）
・エコツーリズム研修
（2013年～受託／酪農学園大学・JICA）

会員募集

週末だけ畑に通いたい、夏休みに遊び行きたい、移住して起業したい、イベントに参加したい、など多様な参加の機会とつながりを広げていきます。
あなたも仲間になりませんか！

● **正会員　年会費一口　¥10,000**
総会の議決権があり、法人の運営に参加できます。
プログラム等の割引あり。

● **サポート会員　年会費一口　¥5,000**
情報誌やメールにて活動報告や各種イベントのご案内をいたします。

郵便総合口座（ぱるる）
【口座番号】19070-38886511
【口座名義】ﾄｸﾋ)ﾎｯｶｲﾄﾞｳｴｺﾋﾞﾚｯｼﾞｽｲｼﾝﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ
※他銀から振り込む場合
【店名】九〇八支店【普通口座】3888651

郵便振替口座
（ゆうちょに口座のない方はこちらをご利用ください）
【口座番号】02700-9-85080
【口座名義】北海道エコビレッジプロジェクト